

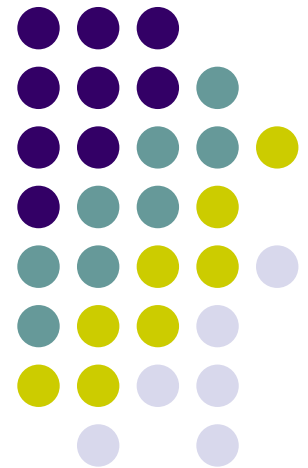
H.18年度 教育学部専門科目

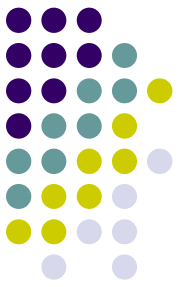
臨床心理学(11) (臨床精神医学)

教育臨床心理学ゼミ

教育学研究科付属子ども発達臨床研究センター

田中 康雄





本日の流れ

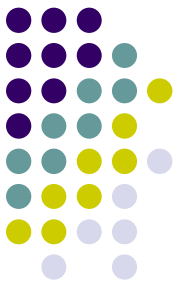
- 前回の意見への返答
- VTR : 死の教育について



前回の意見への返答(1)

- 男性が性的虐待を受けることはあるのか？
 - あります。実はひじょうに多いのではないかとわれています。

前回の意見への返答(2)トラウマ の回復の段階

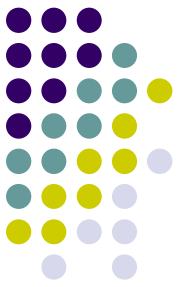


主たる研究者	第1段階	第2段階	第3段階
ハーマン	安全	回想と服喪追悼	再結合
パトナム	診断・安定化・コミュニケーション協力	外傷の代謝	解消, 結合, 解消後の問題対処のスキルの発達
ブラウンとフロム	安定化	記憶の再統合	事故の発達, 衝動統合

前回の意見への返答(2)トラウマ の回復の段階

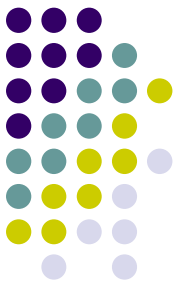


- ハーマンは「回復のための第一原則は、『その後を生きる者』の中にパワーを与えることにある。『その後を生きる者』自身が自分の回復の主体であり判定者でなければならない。その人以外の人間は、助言をし、支持し、そばにいて、立ち会い、手を添え、助け、温かい感情を向け、ケアをすることは出来るが、キュア(治療)することはその人(その後を生きる者)である。善意にあふれ意図するところもよい救済の試みの多くが挫折するのは、エンパワメントという基本原則が見られない場合である。」と述べています。つまり、励まし、勇気づけることは出来るけれど、その力を実感し、その力を試すのは「その後を生きる者」が、十分に安心し、安全感を自覚し、外傷体験を異物として切り離し、「体験」として実感し取り込み、再生することにあります。



前回の意見への返答(3)

- **トラウマはいつの年代にも生じる**
 - 「体験の圧倒性(強度)」とその「体験を処理する能力」の相対的な関係」から生じる
- **PTSD,トラウマという用語を安易に使わないこと**
 - 同意します



前回の意見への返答(3)

- 子どもの死の理解には疑義がある(とても多い意見でした)
 - 一般的には、「死の不可避性についての認識は9歳くらいからはじまり、11歳くらいでは確固としたものになっていきます。」という理解(熊本大学, 木村)のようです。

発達段階別にみた死の教育のテーマと要点（木村）



- 「小学校低学年」
 - 生きた植物とドライフラワー、生きている小鳥とデコイ、生きているウサギと剥製のウサギなどを対比して観察させたり、触らせたりしながら生きているものとそうでないものの違いを実感させる。
 - ペットや小動物（昆虫や魚など）を飼育させたり、観察させる事によって死に出会い命とは何かを実感させる。
- 「小学校中学年」
 - 生物のライフサイクルの中で死とはどのようなものであるかを把握させる、このためにはいろいろな生態系を観察することや、小生態系（ビオトープ）を作ることなどが良いであろう。
 - 一人一人の印象的な死との出会いについて発表させ、グループやクラスで共有させる。
 - 死のイメージとしては墓地や葬儀場の見学をさせ、葬儀のもつ文化（弔問、火葬、埋葬、位牌など）について理解させる。死の不可避性についての認識を確固としたものにする。

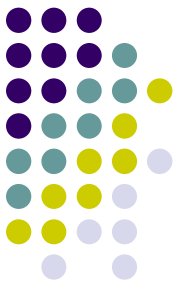
発達段階別にみた死の教育のテーマと要点（木村）



● 「小学校高学年」

- 死という現実が子どもたち自身の問題であり、死を自らとのかかわりの中で理解させる。身近な死について経験を話し合い、疑問点やもっと知りたいことについて調べ学習をさせる。
- 生物による寿命の差、死亡原因、突然死、病死、自殺などについて知る。戦争や紛争は大量の死をもたらすことを理解させる（民族紛争、長崎・広島の実験など）。
- 人の成熟と老化について理解させるとともに高齢者の心のニーズについても知らせる。死とは、ロマンティックなものではなく徹底的に憎むべきであることを実感させる。

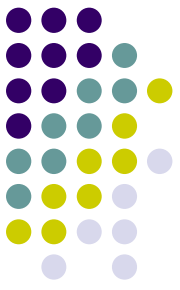
発達段階別にみた死の教育のテーマと要点（木村）



● 「中学校」

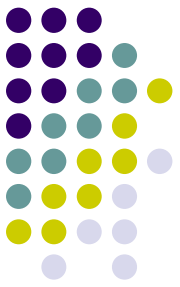
- 死に関する法律や科学的見解について学ばせる。死の判定、心臓死、脳死について理解させる。
- 身近な人との永遠の別れを経験した遺族の悲嘆について知る。悲嘆に陥った人にどう対処すべきか（グリーフワーク）について知り、実行する。
- 自殺防止教育（自殺の原因、自殺者の心理、完遂の方法、自殺をしないためにはどうすべきか）の実施。

発達段階別にみた死の教育のテーマと要点（木村）



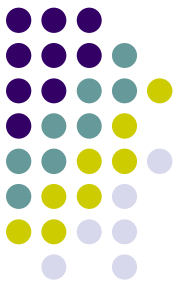
● 「高校」

- 死生観確立への支援を総合的に行う。死について、医学、生理学、社会学、心理学、さらに広く芸術文化に見られる諸成果について理解させる。
- バイオエシックスの様々な課題について自分の意見が持てるように援助する。脳死と植物人間の区別ができ尊厳死の考え方を学ばせる。脳死に陥ったとき臓器を提供するのか、拒否するのか、また家族がそうなった時どうするのか意志決定ができるようにする。
- 安楽死と死ぬ権利についても自分の見解が持てるようにする。死に行く人の心理を理解する。加齢現象の意味がわかり、高齢者への接しかたを知り、実行する。



「死の教育」の必要性

- 死をよく知ることによって、生の価値がわかるようになります。限りある命の尊厳こそ死の教育の本質でもあるのです。



参考

- ・死の教育については、

<http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~mkimura/ronnbun/Death%20Edu.html>

(熊本大学教育学部 木村正治)参照

- ・参考文献

心的外傷と回復、解離—若年期における病理と治療、いずれも みすず書房